

## 平成23年度 大学の世界展開力強化事業構想の概要【米国大学等との協働教育の創成支援】

大学名	広島大学
構想名称	国際大学間コンソーシアム INU を活用した、平和・環境分野における協働教育
相手大学等名 (国名)	ジェームスマディソン大学 (米国), フリンダース大学 (オーストラリア), ラトロブ大学 (オーストラリア), クイーンズランド大学 (オーストラリア), グリフィス大学 (オーストラリア), キョンヒ大学 (韓国), ロビーラ・イ・ヴィルジャーリ大学 (スペイン), マルメ大学 (スウェーデン), レスター大学 (連合王国)

### 【構想の目的】

本構想は、欧州、米国、アジアにまたがる国際的な大学間コンソーシアムである INU(International Network of Universities)の枠組みを利用して、本学の基本理念と密接な関連性を有する「平和」の分野、また、COE プログラム等の実績を有し地球全体の問題と関連する「環境」分野とこれらの融合分野で、地球市民としての自覚をもって、国や地域の持続的発展に資する人材を育成することを目的とする。

この目的を達成するため、大学のトップ・マネジメントのもと、主として以下の方法で人材育成を促進する。

- ・本学学生を海外派遣することにより国際的能力を取得した人材を育成
- ・海外大学学生の広島大学への留学による人材育成
- ・Internationalization at Home
- ・教員・職員の相互派遣による国際化、人的・知的ネットワークの構築

### 【構想の概要】

本構想は、「平和」および「環境」分野における以上のような人材を育成するため、大学入学の早い時期での動機づけに始まる大学教育の各段階で、大学間コンソーシアム加盟校との協働教育を学生の派遣・受入を行いながら実施する。

そのため、本構想は、平和、国際政治分野を中心として現在実施している現行のプログラムの枠組み(学生セミナー、サマースクール、ダブルディグリー・プログラム)をより拡大して実施するとともに、昨年来すでに INU 総会で了承されている、環境、特に水問題に拡大して新たなプログラムを実施し、また、国際政治と環境を融合したプログラムを実施する。

具体的実施形態としては、以下のような、学生の語学能力、目的、履修期間などに応じて開発された派遣・受入を伴う複数のプログラムを組み合わせる。

- ・学生セミナー、サマースクールなどの1-2週間の短期プログラム
- ・広島大学短期交換留学制度を利用した6カ月-12カ月の中期プログラム
- ・ダブルディグリー・プログラムなど長期の学位取得プログラム

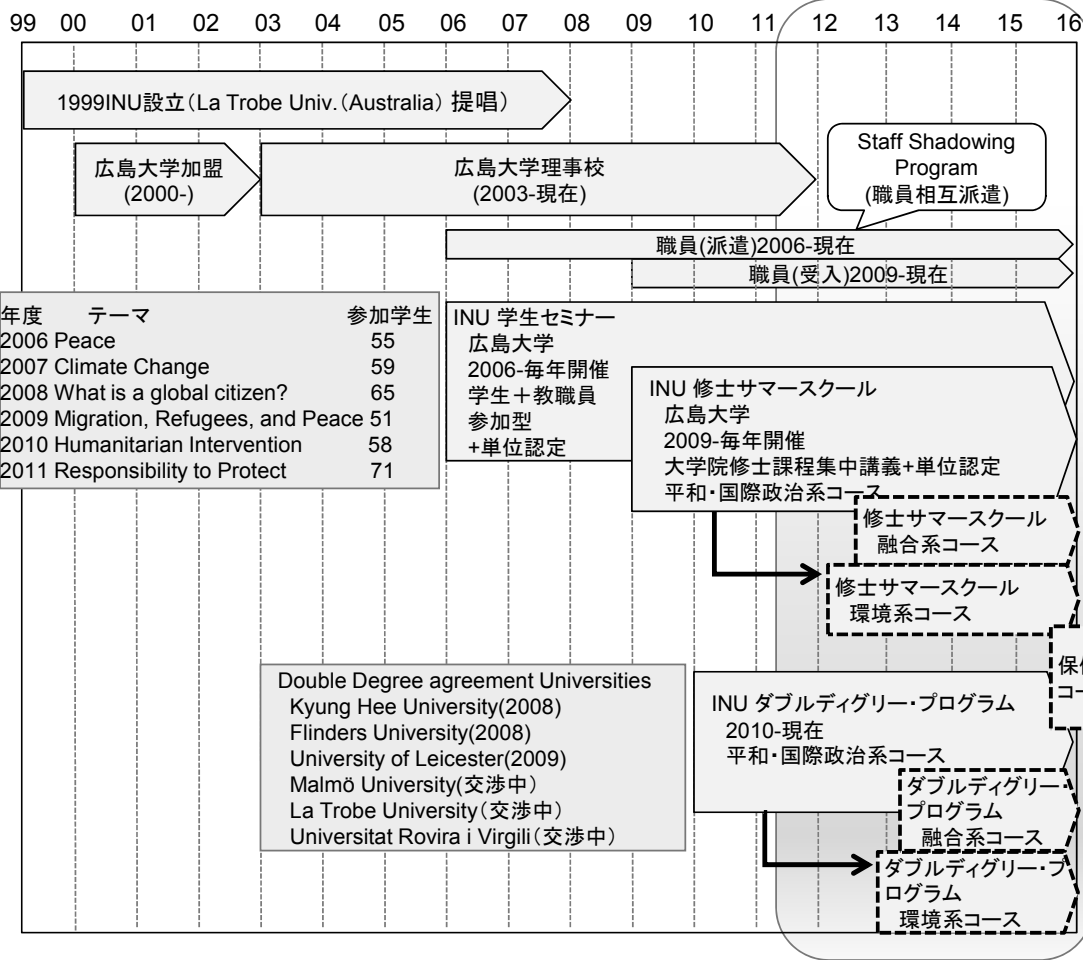
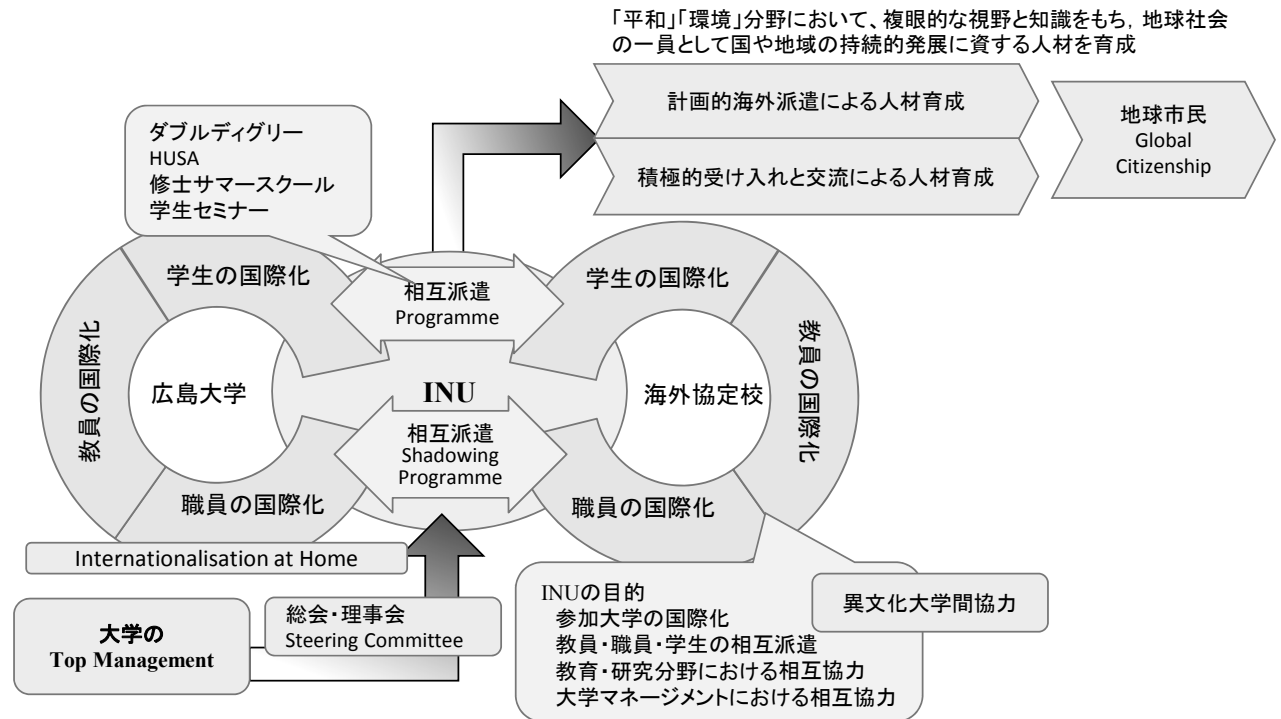
留学生を受け入れる目的は、学生を世界中から1カ所に集めて教育することにとどまらず、プログラム実施を通じて「学生」「教員」「職員」「マネジメント」が共に「国際化」を実現することにある。留学生を受け入れるだけではなく、どのようにしてこれらの学生が留学を全く経験しない広島大学学生に対して新たな知見、経験を与えることのできるプログラムを作るかという、Internationalization at Home の観点を本構想は重視している。

これらのプログラムを実施するために、広島大学また INU では学長等による理事会および総会、担当教員による「ステアリングコミッティー」を開催し、PDCA 体制を確立してきた。このような PDCA 体制を、本取組では、環境分野および国際政治と環境の融合分野に拡大して実施することで、①各分野固有の基礎となる考え方・思考様式を尊重・理解し(言語能力を含む)、②異なる集団を一つの目的に沿って取りまとめる調整能力を持ち、地球社会の一員として国や地域の持続的発展に資する人材の育成を行う。また将来的には、さらに広範な分野(INU 加盟校とは「保健・高齢者社会」分野で合意済み)においても事業を拡大する計画を有している。

国際化は「パートナーシップ」と「オーナーシップ」をどう調和させるかが鍵を握っているが、INU のような、トップマネジメントが主導する国際化ネットワーク(パートナーシップ)では、「オーナーシップ」と融合させつつ発展させることが可能であると考えられる。

平成23年度 大学の世界展開力強化事業の概要【米国大学等との協働教育の創成支援】

[構想の概念図]



平成23年度 大学の世界展開力強化事業 審査結果表

大 学 名	広島大学
タ イ プ	B-II
構 想 名	国際大学間コンソーシアム INU を活用した、平和・環境分野における協働教育
<p>〔評価コメント〕</p> <p>平和や環境という人類や世界にとって極めて重要なテーマを研究課題としてきた当該大学らしいテーマで、日本が期待される国際的プレゼンスに適合した構想であり、これまでの実績に則っている点も評価できる。</p> <p>大学間コンソーシアムを核とした国際化戦略の下で、体系的なグローバル教育プログラムを整備しようとしていること、プログラム遂行のためのプロセスや質保証の枠組みは十分に検討されており、完成度も高く、量的な目標も妥当であると評価できる。</p> <p>しかしながら、環境系のプログラムの強化、人材養成の目標の明確化、学部・研究科にゆだねるだけでなく大学としての学生の英語力強化のための一本化した方針を示すこと等について、さらなる検討が求められる。</p>	